

知覚の複合表現における抽象的移動

高嶋由布子 takashima@hi.h.kyoto-u.ac.jp

京都大学大学院 人間・環境学研究科

本発表では「*色がする、{音/匂い/味} が {する/?ある}、{目/耳/*鼻/舌/口} にする」など、感覚モダリティに関する名詞が軽動詞「スル」を伴って作る複合表現を収集・分類し、認知文法の観点から考察する。各々の名詞のとり格助詞と動詞は、対象との関わりにおける各々の感覚器官の解剖学的構造などの身体性に動機づけられて抽象的移動の方向を選び、知覚者と刺激と刺激の発生源である知覚対象物の空間的配置を反映していることを示す。

1.はじめに

動詞の中でももっとも基本的な語彙のひとつである「する」は、軽動詞としてサ変名詞について動詞化するはたらきをもつものとして注目される。('配達をする/配達する'など)ここでは、それ以外の軽動詞の役割をもつ「する」について、特に以下のような知覚にまつわる表現を中心に分析を行う。

- (1) {光/音/匂い/味} がする
- (2) {目/耳/*鼻/舌/口/手} にする

知覚にまつわる表現は慣用的に成り立っていると考えられるが、ここでは認知言語学の枠組みから、背後にある意味的な動機付けについて考察する。

2.先行研究

- (3) a. 風の音がする
 - b. 誰かの話し声がする
 - c. 沈丁花の匂いがする
 - d. 栗のような味がする
 - e. 背中がムズムズする
 - f. 妙な予感がする
 - g. どうも彼は嘘を言っているような気がする

(寺村 1984)

寺村(1984:100)では、聴覚、嗅覚、触覚、第六官など感覚で捉えた現象の表現が典型的に「～ガスル」で表現されることが述べられている。森田(1977:254)では「N ガスル」のNは諸種の無意志的現象が入り、このほか、肉体・精神的現象、その他の外部現象を挙げている。

- (4) a. {痙攣/悪寒/めまい/吐き気/胸騒ぎ} がする
- b. {稲妻/地鳴り/地響き} がする

(森田 1977)

森田は「N ガスル」のNは、感覚器官などで捉えられるというほかに、「*色がする/*痛みがする」のような自発的な受動現象であるという条件があることを指摘している。また、寺村はこれらと対比して、視覚的な印象が「ヲシテイル」になることを指摘している。

- (5) a. いい色をしている(*スル)
- b. 変わった形をしている(*スル)

(寺村 1984)

これについては佐藤(2003)、影山(2004)などで指摘されている「青い目をしている」型構文で捉えることができる。

- (6) Nは{青い目/よい音色/赤い色}をしている
この「ヲスル」は「テイル」がついた形で現れるのがふつうで、「N1は〈形容詞〉〈Nの属性を示す名詞 N2〉ヲシテイル」という形式で成り立つ。また、このとき(7c)のように連体修飾の場合はシテイルでなくてよいというような特徴ももっている。
- (7) a.*メアリーは青い目をする

b.*メアリーは目を {する/している}

c. 花子は青い目をした人形を持っている

この、属性の叙述をする「〈名詞〉ヲシテイル」型ではN1とN2のあいだの関係が制約になる。

これは視覚的印象だからというような括りよりは、属性の叙述に用いられる構文という説明の方が妥当であると考えられる。

(8) a. このフルート奏者は鋭い音色をしている

a'. *このフルート奏者は鋭い音色がする

b. この料理の味は濃い味付けをしている

ではこの感覚的印象の記述とまとめられた「～ガスル」と、慣用表現的な「～ニスル」と、この属性叙述の軽動詞「～ヲシテイル」構文の使い分けと動機付けはどこにあるのだろうか。

3. 認知言語学におけるイメージスキーマ：抽象的移動の方向

山梨(1994)、菅井(1998)などで採用されている Source-Path-Goal のスキーマを知覚について整理する。外部世界と意味役割については、次のような図（一部改訂）で説明されてきた。

(9) a. 伝令が本土から島に達した(ibid.)

b. 兵士が伝令を本土から島に届けた

■	→	◎	→	▲
[出発点]		[情報] (過程/対象)		[到達点]
<Source>		<Path>		<Goal>
カラ		ガ/ヲ		ニ

図1：Source-Path-Goal のスキーマと格助詞

知覚を表す表現の場合、表現に登場するのは、感覚情報の起点である空間上の知覚対象であるモノ（物体、スピーカーや人、花やゴミ、食べ物など音・におい・味の発生源）と情報をのせる知覚刺激（光波、音波、化学物質）そして到達点に知覚刺激を捉えて言語表現を産出する我々人間がいる。刺激から情報を得るのは人間の心のはたらきによってだが、日本語では二つの抽象的(仮構的)移動の方向性が観察できる。(cf.谷口 2005,高嶋 2009)

(10) a. 私の自室からは富士山が見える

b. 私は自室から富士山を見る

(11) a. 街角から {賑やかな音楽が聞こえ/ゴミが臭つ} て {いる/くる}

b. 私は音楽を聴く

自動詞(10,11a)では視覚と聴覚・嗅覚ではダイクシスが異なっているが、他動詞(10,11b)では知覚者(の場所)が起点となり、ヲ格の対象物へのダイクシスが表現される。自動詞におけるダイクシスについては

対象物と知覚刺激が分離して認識/表現できる音や臭いか、そうでない(モノにおいて色や形はモノの場所に「在る」属性として表現される)かによる。

五感においては、視・聴・嗅覚が知覚者と知覚対象が直接接しない遠感覚であるのに対し、味覚・触覚は直接接触する近感覚であり、知覚刺激とモノが一致する。

ここでは知覚の表現における格助詞にコードされる方向は、知覚されるモノを起点に知覚者へ刺激が及ぶ方向がある一方で、知覚者を起点とした知覚者からの他動的な動作が知覚対象に及ぶ逆向き方向があることに着目する。

4. 「N {ガ/ニ} スル」名詞の分布とテスト

コーパスなどを元に、スルと共起するサ変名詞以外の名詞から、知覚に関する名詞を収集した。このときそれぞれの特徴を整理する。

4.1. N ガスル

N は「音、匂い、味、手触り」などの知覚刺激や「気」をとれる。ただし、「色、光、形」など視覚における刺激はとれない。

(12)音がする〈聴覚〉

a. 隣の部屋でへんな {音/声} がする

a'. 誰かが僕を呼ぶ声がする

b. 隣の部屋は物音もしない

b'. 音 {が/の} しない部屋

c. 動き、音が {する/出る} おもちゃ

d. 遠くから笛の音が {??し/聞こえ} てくる

d'. 外からバイクの騒がしい音が {する/してくる}

e. この木魚はいい {音/*音色} が {する/鳴る}

e'. この木魚はいい {音/音色} {を/??が} している

f. 耳鳴りがする

(12a)のように音声を特定する表現を前に伴って聴覚刺激をキャッチしたことを表現する。(12b,c)のようにながしかの音が聞こえるかそうでないか、出るか出ないかなどに関して「～ガスル」が使える。このとき「*音がある」が不可なのは時間による変化と消滅が存在の意味を持つ「ある」と相容れないからと考えられる。また、(12d)のように刺激の移動を

「テクル」でコードすることはないが、刺激の発生源が移動していると考えられる場合は(12d)のように「テクル」が使える。また(12e)のように刺激の発生源である木魚と知覚刺激であるその音が属性叙述関係だと認識されるので、属性を叙述する「～ヲシテイル」が使えることが指摘できる。

(13) 匂いがする〈嗅覚〉

- a. お母さんはいい匂いがする
- b. 隣の家からめざしの焼けるいい匂いが{する/してくる}
- c. シャンプーはいい匂い {がする/をしている}
- d. いい匂い {がする/のする/?をしている} シャンプー
- e. 臭い {が/の} する犬=臭う犬
- e'. 犬が {*φ/いやな} においをしている
- f. においが {しない/ない} 部屋
- g. 風邪を引いていてなんのにおいも {しない/*ない/嗅げない}

(14) 味がする〈味覚〉

- a. このたこ焼きは {*φ/イモの} 味がする
- b. このおでんはいい味をしている
- c. この昆布がいい味を出している
- d. 悲しくて何を食べても味が {しない/*ない}
- e. 味が {しない/ない} おでん

におい・味の場合も、(13e,f)(14e)のように刺激があるかないか、という観点で「～ガスル」がつかえる。(14d)のように知覚主体に原因がある場合は「味ガスル」しか許容しないが、(14e)のように知覚対象(おでん)に起因する場合は、「味がない」を許容する。このことから「～ガスル」は、知覚主体に向かつての表現であり、知覚する主体の行為を反映していると言える。

(15) {さわり心地/手触り/感触} がする〈触覚〉

- a.* このコートは手触りがする
- b. 別珍のコートはよい {さわり心地/?手触り/感触} がする
- c. このコートはいい手触りをしている
- d. 異物を食べたという感触が {する/ある}

触覚に関しては触れられることがモノの存在の認識、つまり触れることと不可分に感触を感じるのので、(15a)が不可になる。(15b)のように、「ガスル」でも

知覚対象からの刺激を感じることを示せるが、(15c)のように手触りはコートの布地の属性とし、属性の叙述として「青い目をしている」型構文も使用可能である。

このように、各感覚モダリティによって、何を属性と見なすか、知覚刺激が知覚対象から知覚者へ移動(仮想的な過程)することを示せるかなどの差が観察される。「～ガスル」は基本的には知覚の自動詞と同じく自発的な刺激の受容=情報を知るという側面を示す。

(16) a. 鍋からいい {音/匂い/?味} がしてくる

- b. よく煮ると大根からいい味が出てくる
- c. よく煮ると大根に昆布の味がしみてくる

音と匂いは、知覚の局面において知覚刺激と刺激の発生源が分離されて認識されるため移動を表す「テクル」をつけても使えるが、味覚はそうではない。しかし、知覚の局面を表さない「味が出る/しみる」などの場合は、その限りではない。

4.2. (知覚主体が知覚対象ヲ) N ニスル

(17) {目、耳、*鼻、口、*舌、手、気} にする

- a. 太郎は事故現場を {目にした/見た/目撃した}
- b. 花子は事故に関する噂を {耳にした/聞いた}
- c. 次郎は線香の匂いを {*鼻にした/吸った/嗅いだ}
- d. 三郎は事故に関する情報を {口/*舌} にした
- e. 陽子は和菓子を {口/*舌} に {した/したことがない}
- f. 先生は西陣織を {手/*指} にした

「Nニスル」のNには知覚を担う身体部位が入る。このとき知覚対象物をヲ格にとり、「〈身体部位〉ニスル」は、〈知覚対象を知覚した〉という意味になる。ニ格をとるので、知覚の他動詞(見る、聞く、嗅ぐ…)に比べて偶発的に知覚器官に飛び込んできたという経路と過程を背景に、到達点を表現すると言える。

「口にする」は多義的で、(17d,e)「口に入れ味わ、食べること」のほか、「情報をしゃべる」意味も持っている。

(18) a. 包装をはがして中を {見た/??目にした}

- b. 見たけど見えなかった
- c.* 目にしたけど目にできなかった

「〈身体部位〉ニスル」はヲ格をとっていながら他動性が低く、(18b)のように知覚しようとするプロセスと知覚して情報を得たという到達相を文脈によってどちらも表現できる他動詞「見る」などと違い、(18c)で知覚しようとするプロセスは表現できない。(19) a. 指輪を薬指に {した/はめた}

b. オーストラリアで私は {鼻/舌} にピアスを {した/つけた}

c. 本物の宝石をやっと {手にした/触った} (≠つけた)

d. 手に手錠をした犯人 / 手錠を手にした警官

「N ヲ〈身体部位〉ニスル」は「N ヲ身につける」という意味でも使われる。一概にどの名詞がどの意味になるとはいえない。傾向としては、語順が「〈身体部位〉にN ヲスル」になると、身につける意味でとらえやすい。これはN と〈身体部位〉の関係および文脈によって解釈が揺れるため、一概に「〈身体部位〉ニスル」の意味が〈身体部位〉ごとに慣用的に定まっているとはいえない。

5.まとめと考察

「〈知覚刺激〉ガスル」は、知覚の自動詞と同じように、知覚刺激の自発的な知覚というイベントを知覚者を背景として表現する。存在を表す「ある/ない」と比べると知覚者の存在が含意されて、知覚者と知覚刺激のあいだの関係性（これを移動と呼ぶのは不自然ではある）を表現するものであると言える。しかし「〈知覚刺激〉ガスル」というとき、「音が耳にする」などとは言えず、知覚者およびその身体部位は表せない。また、知覚刺激となる名詞によって制約がある。

一方で知覚における着点として〈身体部位〉をニ格にとる「〈知覚対象・刺激〉ヲ〈身体部位〉ニスル」は知覚対象物から知覚器官への抽象的(仮構的)移動というイベントを示している。「耳にする」ことができるのは音声だけであり、「目にする」ことができるのは視覚で捉えられるモノゴトである。指先で点字をなでることを「指にする」とはいわず、「〈身体につけるモノ〉を〈それをつけるべき身体部位〉ニスル」で、装着するといった意味にもなる。これはヲ格とニ格に来る名詞の関係と文脈で意味が変わって

くるので一概に〈身体部位ニスル〉の意味を辞書に記述すればいいというわけでもない。

属性叙述の「青い目をしている」構文は、視覚以外の感覚モダリティでも有効であることも確認された。「音がする」のようなものは環境における刺激のありなしと刺激と知覚者の関係をコードするが、属性叙述の構文では、刺激を出すモノが出す刺激にどんな属性をもたせる可能性があるかを示し、現実の知覚というイベントを表してはいない。

「が、に、を」がそれぞれ知覚というイベントのそれぞれの局面（刺激の発生、刺激を捉えること、刺激が属性を所有すること）をコードする一助となり、格助詞は空間的關係と移動に基づいて選ばれ、「する」は身体部位や知覚刺激の名詞につく軽動詞的な役割を果たしている。

最後に「彼は息子を医者にした」「彼の息子は医者になった」など「N ニスル」と「N ニナル」の関係は「目にする」に対して「*目になる」は使えない。これに対し、第六感とよばれる「気」にはこの対応関係が成り立つ。これは「気」の多義として説明するのが妥当と考えられる。

(21) a. 生徒はその値段が高い気がした

b. 生徒はその値段を気にした

c. その生徒は土産の値段が気になった

【参考文献】

- 影山太郎. 2004. “軽動詞構文としての「青い目をしている」構文”, 日本語文法 4(1). 22-37.
- 森田良行. 1977. 基礎日本語—意味と使い方—. 角川書店.
- 佐藤琢三. 2003. “「青い目をしている」型構文の分析”, 日本語文法 3(1). 19-34.
- 菅井三実. 1998. “対格のスキーマ的分析とネットワーク化”, 名古屋大学文学部研究論集 44. 15-29.
- 高嶋由布子. 2009. “五感のダイクシス—知覚主体と刺激の関係の身体性—”, 日本認知言語学会第九回大会発表論文集. (to appear)
- 谷口一美. 2005. 事態概念の記号化に関する認知言語学的研究. ひつじ書房.
- 寺村秀夫. 1984. 日本語のシンタクスと意味Ⅱ. くろしお出版.
- 山梨正明. 1994. “格解釈と認知プロセス (日常言語の認知格モデル 1) ”, 言語 23(1). 100-105.